

我が国近代リゾート地の発展過程に関する研究

榎鹿島建設 正会員 西村 真
東京工業大学助教授 正会員 渡辺 貴介
東京工業大学助手 正会員 安島 博幸

A Study on the Development of Highland Resort in Japan (1860'-1930')

by Makoto NISHIMURA, Takasuke WATANABE and Hiroyuki YASUJIMA

概要

我が国の高原リゾート地は、明治期に日光、箱根、軽井沢を中心に発達した。そこで本研究では、その原点といえる近代（明治期から昭和初期）の高原リゾート地の発展過程を調べることににより、その成立の背景、空間パターン、関連産業・技術導入について明らかにすることを目的とした。その結果は次の通りである。

① 成立背景については、居留地外国人による高原リゾートの概念の移入、高原開拓跡地の存在、鉄道の整備、離宮建設などがあった。

② 空間パターン、関連産業・技術については、放射環状道路、電車、発電所、電信・電話など、新しい西洋の文明が積極的に導入され、都市の近代化のバイオニアとしても機能していた。

キーワード：成立過程、近代、高原リゾート地

1. はじめに

我が国では、明治期に西洋から避暑の概念が導入され、箱根や日光、軽井沢などを中心に発達して来た。これからの高原リゾート地開発を考えるにあたっては、我が国の高原リゾートの原点というべき近代（明治から昭和初期戦前まで）にたちかえり、当時の思想を辿ってみることも必要であろう。ところが、近代高原リゾート地の空間開発の内容、及び地域的歴史的役割について言及した研究は不足している。そこで、本研究では関東圏を中心とした近代高原リゾート地の発展過程、及びその空間パターン、関連産業・技術の導入の様子、またその地域開発に果たしたを明らかにすることを目的とする。

2. 近代高原リゾート地の発展過程

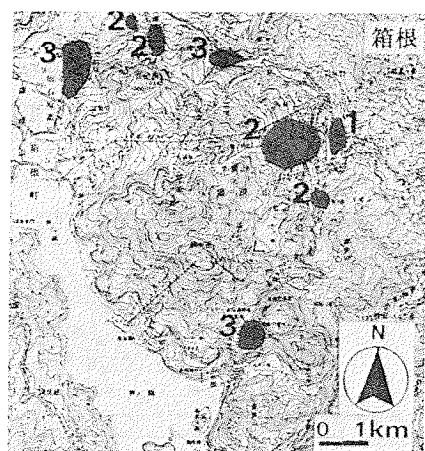
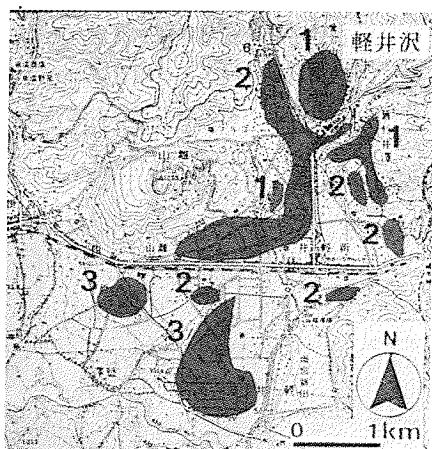
図-1は明治10年代、図-2は昭和初期の関東圏の様子を示したものである。近世までは、箱

根は「箱根七湯」として温泉宿集落が形成され、日光は「日光詣」として門前町が形成され、軽井沢は中山道の一宿場町であった。明治にはいり、横浜居留地を中心とした在日外国人たちが「避暑」を目的として、日光、箱根などへ遠出しはじめた。E. S. モースの「日本その日その日」、イザベラバードの「日本奥地紀行」などに当時の様子が詳述してある。交通手段は、当初は馬、人力車、かごなどに頼っていたが、明治18年に上野-宇都宮間、同20年に横浜-国府津間に鉄道が開通し、到達性が高まった。そうして日光は在日外交官を中心とした高原リゾート地が形成された。ヘボン博士の進言で、地元の金谷善一郎が日本初のリゾートホテルとして金谷ホテルを建て、中禅寺湖畔には別荘が建った。あわせて皇族他の上流社会の日本人も避暑に来るようになり、明治23年の山内御用邸をはじめ、田母沢御用邸、田母沢付属御用邸なども次々建てられた。箱根では明治2

新湯
日光
草津
那須
軽井沢
伊香保
箱根
横浜
神戸
(凡例)
● 居住地
▲ 温泉地
□ 高原開拓
— 鉄道(明治20年)

● 大高原リゾート地
○ 小高原リゾート地
— 鉄道 (明治38年末)

成立年代
1-明治
2-大正
3-昭和



この民間人による牧場、西洋式大農場経営の試みは軽井沢、箱根でも企てられたが殆ど失敗におわり広大な用途のない私有地が高原に残された。例えば軽井沢では鳥居義処、川上操六、雨宮敬次郎、箱根では益田孝らの耕牧舎、渋沢栄一などによるものがあつた。これは後の大規模な民間分譲別荘地開発に土地を用意することとなつた。さて、こうして外国人を中心に始まつた高原リゾート地は、大正期に入るとますます隆盛した。軽井沢、箱根を中心として、開発当初の外国人に代つて日本人（堤康次郎、野沢源次郎、渋沢秀雄ほか）による大規模な別荘地開発が進み、上流階級の日本人所有の別荘も急増した。明治45年の碓氷峠アプト式鉄道の電化、大正8年箱根登山鉄道の開通などによる到達性向上もその大きな要因となつた。

3. 近代高原リゾート地の空間パターン

箱根、軽井沢を中心とした29箇所の別荘地単位の空間パターンを現地調査、および地図調査により調べた。その結果つぎの4タイプに分類できることがわかった。

① 洋風タイプ

道路は自然地形に素直に対応している。別荘は草原など眺望の良いところに開放的につくられた。洋風建築の簡略形が主で、明治期～大正期の外国人別荘が多い。

② 和風タイプ

既存道路を軸とし、個々に取付道路を引いている。線形は地形に即している。別荘は個々の区画が孤立し樹木に囲まれており閉鎖的なつくりになっている。和風建築が主で明治～大正期の

自然発生的な日本人別荘が多い。

③ 和洋折衷タイプ

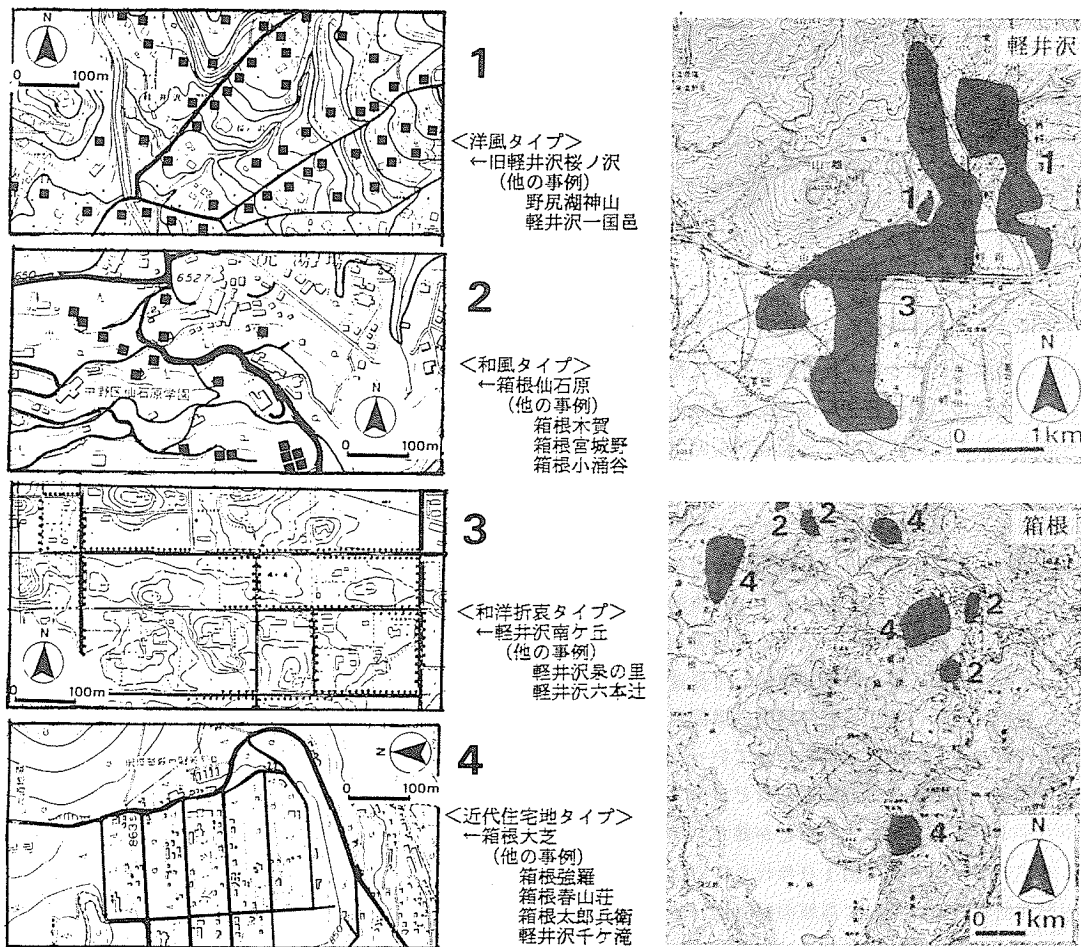
格子状だが既存道路や地形により変形している。街路樹がよく整備されている。大正～昭和初期の西洋文化の摂取に熱心だった上流社会の日本人が建てた大きな洋風建築が多い。

④ 近代住宅地タイプ

地形変化に係わらず整った格子状道路である。別荘は擁壁や生け垣などにより明確な区画境界をもっており、庭木も豊富である。大正中期～昭和期の民間分譲地によくみられる。

4タイプとその変遷を図-3に示す。昭和期にはいると近代住宅地タイプが発達したが、これは造成技術の向上と合理性志向の高まりによるものと思われ、別荘地の適価大量分譲、すなわちリゾ

(図-4) 4タイプの空間パターンとその変遷

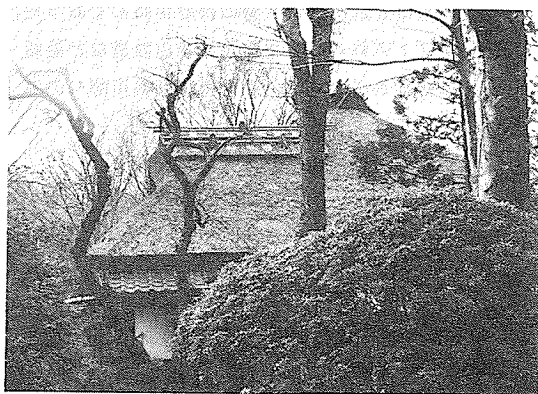


ートの一般国民への普及と表裏一体の関係にあるといえる。

さらに空間について次の2点の特徴が指摘できる。ひとつは風景の扱いについてである。洋風および和風タイプに顕著であるが、外人は見晴らしの利く草原に、日本人は樹木の中に別荘を構えた。これは各々の母国の原風景に根ざした理想的な風景を反映している。軽井沢一帯は元々草原と周辺地の樹木で特徴づけられた風景であったが、明治期の外人避暑客はそれを各々の母国の風景に似ていと称していた。一方正宗白鳥などは殺風景だと非難していた。屋敷林、雑木林などの緑に囲まれて居を構えるのが日本の原風景の一つであったと言える。もうひとつは放射環状の道路パターンについてである。都市部では大正12年の田園調布をはじめとし数箇所の住宅地でみられるが、

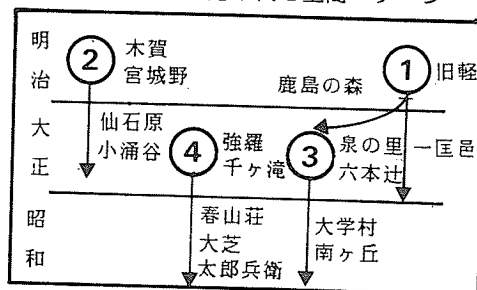


開放的な構えの洋風別荘

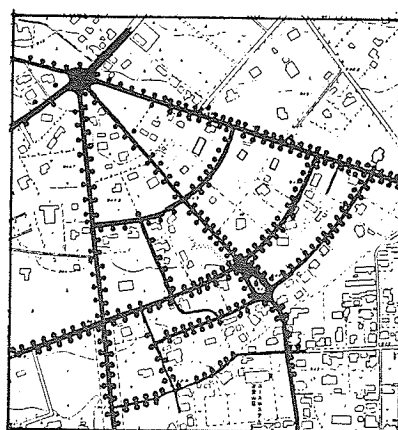


樹木に囲まれた和風別荘

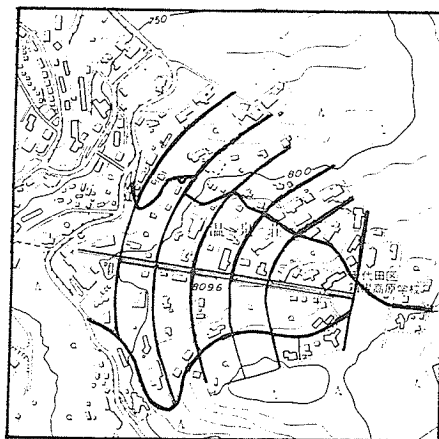
(図-5) 開発年代と空間パターン



(図-6) 高原リゾートに見られる放射環状の道路パターン



軽井沢六本辻 (大正末)



箱根温泉荘 (昭和初)

高原リゾート地においてもほぼ同時期にみられ、先進の空間設計技法が導入されたことがわかる。これらは野沢源次郎による軽井沢の六本辻、渋沢秀雄の指導による箱根温泉荘である。前者は路側の石畳に街路樹を植えたもので、やや不整形である。後者は二列の中央植栽の施されたメイン通りや7.5M間隔の整った環状道路など、かなり平面図形を意識したものとなっている。

4. 関連産業／技術の導入

ここでは特に、鉄道、発電、通信の3点について述べる。

＜鉄道＞ 明治初頭、横浜居留地のシールズ商会により我が国初の乗り合い馬車が走った。明治20、21年には軽井沢、箱根で早々と馬車鉄道が走った。都市部でもまだ少ない頃であった。明治26年に碓氷峠にアプト式鉄道が開通したが、これは当時最新の技術であった。小田原馬車鉄道は明治33年電化したが、これは神奈川県2番目、全国で4番目であった。小田原電鉄には東京市電の前身の電鉄会社から運転手が研修に来ており、東京市電のモデルケースになったといえる。また大正8年に箱根登山鉄道が開通したが、これは先進地スイスにならい外国人観光客誘致策のために山岳観光地の到達性向上をはかるという新政策にのっとったものであった。登山鉄道としてはいまだに全国唯一のものであるが、その設計には碓氷峠アプト式鉄道の設計技師（吉川三次郎他）が当たった。

＜発電＞ 箱根、湯本では明治25年に箱根電灯発電所がつけられた。これは水力発電所としては関東初、全国では同24年の京都蹴上発電所について2番目であった。さらに同33年小田原電鉄により湯本茶屋発電所がつけられた。これは京都蹴上発電所と同じく、鉄道電化のための施設といった色彩が濃いものであった。

＜通信＞ 箱根では明治14年宮の下に、日光では同19年に中鉢石に夏期専用の電信局が設置された。また同35年には、箱根宮の下、日光など避暑地、温泉地に特設電話が設置され、同43年

には軽井沢でも電話交換が始まった。地方部においては異例の早期設置であったが、これは政財界の重要人物が集まる避暑地には、東京と結ばれた情報網の整備が必要であったことを示す。

5. まとめ

本研究によって明らかになった点を以下に整理する。

（1）近代高原リゾート地の成立について

関東圏において、高原リゾート地が日光、箱根、軽井沢等において成立した様子は既述の通りだが、その背景には次の諸点があった。主な成立条件は次の通りである。

○居留地の外国人が高原リゾートの概念をもちこんだ。

○広大な私有地が高原開拓により用意された。

○鉄道の開通により到達性が高まった。

○離宮の建設が周囲の別荘地開発を刺激した。

（2）近代高原リゾート地の特徴

近代高原リゾート地では、新しい西洋の空間思想および諸産業、技術などが積極的に導入されており、都市の近代化のバイオニアとしての機能も持っていた。

○外国人は見晴らしの利く開放的な風景を、日本人は樹木にこもる風景を求めたが、それらは徐々に融合し新しいパターンを作っていた。

○当時最新の放射環状の道路パターンが導入されるなど西洋近代文明の摂取が盛んであった。

○アプト式鉄道、鉄道電化、登山鉄道など最新の技術が導入され、鉄道電化は都市部への導入のテストケースとなった。

○都市部との情報網が整備された。

〔参考資料〕

- 1) 佐藤孝一「かるゐざわ」教文館、大正1年
- 2) 島崎清「軽井沢百年のあゆみ」昭和53年
- 3) 「軽井沢別荘案内地図」大正11年
- 4) 岩崎宗純「箱根七湯」、有隣堂、昭和54年
- 5) 「箱根町明細地図」明細地図社、昭和60年
その他省略